

男女平等参画論を超えて，人類文明の高みを語ろう

A Scope Beyond the Gender Equality— Leadership Toward a More Sophisticated Civilization

安部明廣 Akihiro ABE

はじめに

会誌高分子に掲載された男女共同参画に関する識者の記事は、甘口、辛口の意見を交えて、すでに38編(M14:W25)に上る。栗原先生のご下命とあってうっかり受けてしまったが、私ごときが付け足すことは何もない。そもそも、女性の数は男性とあまり変わらないという意味で、女性共同参画はマイノリティー問題と同一ではない。女性という共通項の集まりがあるのなら、そして、その場で共有される理念(行動目標)が創造されるのなら、男性社会に対する批判も含めて、社会とはどうあるべきかという新しい概念が生まれてもよいのではないかと考えた。そもそも1986年の男女雇用機会均等法施行以降の動きも海外の動向を受けてのことであり、日本発ではない。明治23年(1890年)に来日したラフカディオ・ハーンに「日本の女性は本当にすばらしい」と言わしめた伝統をもつわが国の女性達に「人類文明の新しい夜明け」への抱負を語って欲しいのである。

何かに追われるように男性社会に参画しようとする人、男性社会では女性が希少価値であることを利用した目立ちたがり屋も多い。女性の先覚者とはとても思えない。響きを買うだけである。率直に、女性共同参画問題に対する女性側の取り組みにはまだ多くの論点が残っている。

男性社会はますます先行き不透明

人は一人では生きられない。しかし人口密度が高くなると、協調よりは競争に偏る。そしてやがて戦争になる。1989年、昭和が平成に替わった年、ベルリンの壁は崩壊し、以後東西対立のエネルギーは急速に低下した。軌を一にして世界の科学アカデミーを中心に地球環境問題が人類共通の課題として目前に横たわっていることに気が付く。大まかにエネルギー保存と質量不滅の法則に縛られている地球はあまり大きな負荷には耐えられない。地球人口はすでにその許容量を超えていると言われる。さすれば人類の未来に中庸の道は難しい。二つに一つ、端的に戦争か絶対平和かである。最大の無駄の一つが軍備とわかっていても、これを手放すことはできない理由はここにある。オバマ大統領の演説を評価する向きの気持ちはわかるが、米・ロが率先して核戦力をゼロにしようという話ではない。費用負担も大変なので、ある程度まで核兵器を減らそうというのが精一杯である。軍事力を抜きに、人類が“安定”な社会(一度剥けた文化・文明)を築き得るといふ図式を彼が提示しているわけではないからである。リーダーとされる人の視野の広さ、人物の大きさがその組織より大きいときには組織は安泰である。会社も、国も、世界も基本は同じである。今のリーダー達は、悲しいかな、軍備、核兵器が最大のエネルギーロス

であることを知りながら、それらのない世界がどのようなものを語れないでいる。

男性が作ってきた社会は、世界も日本も、すでに十分競争的である。昨今の経済問題、競争の結果引き起こされた社会問題を、また競争で解決しようとする愚かさは見ていて痛ましい。論語で言えば、「本が立たず、したがって道が見えない」のである。

社会で働いている男性の多くは、ほかに選択がなかったからである。市場原理主義の横行の中で、他人との間合いを計りながら実直に生きることすらむずかしくなった。男性社会の文化を決めてきたのは、実は100人の中の上10人ではなく、従順に競争原理を受け入れてきた下の90人なのかも知れないのである。管理職の女性割合などを男女平等参画の指標としてさも意味あり気に宣伝し、男性社会の犯した愚を繰り返さないで欲しい。問われなければならないのは数ではなく質である。

DNAの超克—自分との戦い

競争原理に基づく社会観では、当然軍備は必要悪である。それでは軍備や、核兵器の廃棄も単に言葉の遊びに過ぎなくなる。女性参画が、人間の思考、文化を変え、人類文化をもう一段の高みに導くものであって欲しいと願っている。それには、女性同士が、ただ単に男性社会に浸透圧的に参画しようというのではなく、新しい文化・文明を下から築こうという決意をもって人類社会にさらなる可能性を見出すことから始めねばならない。提案は恐らく今よりも、個と全体、秩序と無秩序のバランスがうまく取れた社会像であろう。より心地よい環境の建設に男性も喜んで参画するに違いない。

言い方を変えよう。神(自然)は生命を競争する(強いDNAが生き残る)ものとして創造した。人間が、DNAの超克に成功して、競争を抑えた文明を築き上げられるかどうか問われている。これはDNAの教えに忠実な男性にはできそうもないということである。

研究者コミュニティは変革を待っている

学会は、研究者の活動を助けるための社会的なデバイスである。学会には絶えず生まれ出るものがなくてはならない。社会の変化が激しいとき、会員の伸びが止まって久しい古い学会がただただあり続けるのはよくない。学問の伝統は大切にしなければならないが、同時に「学界」には柔軟に「学会」組織を組み変える発想がなくてはならない。日本の学会で閉塞感が語られるようになって久しいが、男性社会のしがらみがなかなか変革を許さない。要は、どうすればもう一度剥けて、真に「学問を創る国」になれるかということである。ここでも新鮮な目をもつ女性研究者の集まりからの大局的な提案が待たれている。

東京工業大学名誉教授
専門は高分子の構造と物性。
E-mail: aabe34@xc4.so-net.ne.jp